

文化施設による学校外教育の 可能性に関する調査研究

——高松市民文化センター「日曜子ども教室」参加者調査を中心に——

押 谷 由 夫

はじめに——問題の所在

1976年文部省は、初めて全国規模の「児童生徒の学校外学習活動に関する実態調査」を行なった。⁽¹⁾ 学習塾へ行っている者は、小学高学年で19.7%、中学生で38.0%。家庭教師に付いている者は、それぞれ2.5%と6.1%にすぎないが、けいごとになるとぐんと増えて、小学低学年61.2%、高学年64.5%、中学生25.1%。重複している者もいるが、おそらく小学生・中学生ともに半数以上のものが、毎週2日程度は学校とは別の機関ないしルートで学習を行っていることになる。その後の調査でもこれ以上の数値が示されている。⁽²⁾

子どもの学習活動を活発化することは、子どもにかかわるすべての人々や教育機関が目標としなくてはならぬことであり、きわめて望ましい現象である。だが、その内容を考えた場合、今日の学校外教育の現状は、大きな問題を含んでいるといわねばならない。現代の教育全体をおおっている受験準備教育の影響をまともなうけ、上級学校受験にむけて、一方的に学習をおしつけられる形で展開されている場合が多いからである。文部省の調査でも、受験が近づく高学年ほど、また受験競争の激しい都市ほど、学習塾通いが増加している。また学習塾でうける学習内容も、高学年ほど「進学準備」の割合が高くなる。きわめて自由であるべき学校外教育が、受験準備教育という名のもとに徐々に管理され、その結果が、学校外教育の隆盛としてあらわれているのである。

この現象を我々はどう受け取めればよいのか。1つには、学校教育批判として考えることもできよう。が、他方では、学校外教育そのものの不備を指摘しないわけにはいかない。

子どもたちにとって学校外教育は、そもそも学校教育とは別個のものとして存在した。極端にいえば、学校では先生の監視のもとに行動が規制され、所定の勉強を強制されるのに対し、学校外ではそういった規制もほとんどなく、まったく自由に遊びほうけておればよかった。子どもにとって、学校と学校外とは、宿題や若干の行動規制を通しての結びつきはあったが、その活動内容はほとんど別のものだった、といってよいのである。学校外教育の魅力は、先生の目と、強制的な規制から開放され、好きな友だちと、好きな遊びを思い存分行なえるというその自由さや解放性にあった。

しかしながら、この自由さが、逆に学校外教育に混乱をもたらすのである。つまり、自由の名のもとに学校外教育が放置されている間に、急激な工業化や受験体制の波が学校外教育の領域を侵食していったのである。遊び場や自然環境の破壊は進み、遊び友だちは減少し、学校外教育が、学校以外の営利的学習機関によって管理される状態がますます強くなっていく。

こういった状況を考えるとき、子どもの自由な活動を保証し、すいあげてやる学校外教育政策が早急に要請されるのである。文部省や各自治体は、今日ようやく学校外教育の充実に力を入れはじめ、多様な政策を徐々にうち出してきている。⁽⁴⁾

しかし、それらはまだまだ不十分である。条件整備にあわせて運営方法や活動方法など内容的側面をも考慮した総合的な立場からのとりくみが期待されるのである。

I 本研究の目的

以上の問題意識の延長線上で我々も様々な調査研究を行ってきた⁽⁵⁾。そこで明らかになったものの1つは、校外学習の核として文化施設が考えられるのではないかということである。本研究は、それらをふまえて、学校外教育の中心となるべき文化施設が、どんなとりくみを行えばよいか、また文化施設利用学習の効果ないし可能性はどの程度あるのか、もっといえば、塾にとられている子どもを文化施設の方に向かせることができるかどうかを明らかにしようとするのである。

このように研究対象を限定して、既存の調査研究をみるとどうか。子どもの校外生活に関する実態調査や、文化施設の実状に関する調査、さらには文化施設に対する希望調査などは多いが、具体的に、文化施設が行なう子ども用教室を取り上げ、その内容の検討や参加者に反応を調査したものは、最も重要であるにもかかわらず少ない。そこで本論文は、高松市の市民文化センターの行う「日曜子ども教室」を事例としてとりあげ、参加者の反応を調査することから問題にアプローチしようとするのである。

なお、この事例を選んだのは、高松市民文化センターが、教育に熱心な香川県の中心都市高松にあって、最も充実した社会教育施設であり、子どもの社会教育にとってもまた中心的な役割をはたしている点。さらに「日曜子ども教室」は、文化センターの行う子ども用主催行事としては最大のものであり、人気も非常に高いことなどから、先にあげた問題や、今後の文化施設のとりくみを考えるのに大きな示唆を与えるのではないかと期待したからである。

本研究の目的は、一応次の3点に絞っている。

第1は、受講生の特性、つまり、どういった子どもたちが、どこから、どういった目的で受講しているのか。

第2は、「日曜子ども教室」が、学習者に対してどの程度の教育力を発揮しているのか。それらは学校と比べてどうか。

第3は、それらをふまえて、文化施設は今後どういったとりくみを考えていけばよいか。

なお、第2の学習者に対する教育力について説明しておく。文化施設の教育力には、ふつう学習者に対するものと、地域社会に対するものが考えられる。いうまでもなく、文化施設は学習者個人に対して、どれだけ教育力を発揮するかのみならず、地域社会の文化遺産に対する理解や地域住民の文化や生活レベルの向上、連帯感の育成といった側面にはたす教育力が要請されるからである。

しかし、子どもにとって文化施設が学校と並ぶ学習活動の核となるには、まず、学習者に対する教育力が高いことが要求される。これは主に次の3つの側面から測定できるのではないか。

第1は、どの程度、子どもの興味を喚起できるか、第2は、理解度、思考力さらには創造性の育成はどうか、第3は、さらなる学習意欲や仲間づくりなどへの発展性はどうか、といった点からである。

これらもあわせて分析することにしたい。

II 調査の対象と方法

今回行った調査対象は、昭和54年の5月から7月にかけて行われた第14回日曜子ども教室のうち7月8日実施の教室に参加した者、及び昭和54年10月から昭和55年2月にかけて行われた第15回日曜子ども教室のうち12月16日実施の教室に参加した者すべてである（アンケートの性格上、小学低学年対象の教室は除いている）。なお、若干の教室において実施日を変更したところもある。

実施当日参加者全員からアンケートを回収できた。その内訳は表1に示している。なお、各教室の定員は若干を除き毎回30名であるが、教室が、14回、15回で変わっているものもあるため、サンプル数はかなりのばらつきがある。また参加者は、毎回おおむね1～2割程度の欠席者がでる。これは、子ども会の行事や家庭での計画などと重なり、欠席をよぎなくされるためである。この種の教室を開くには、他の学校外活動との十分な調整が不可欠である。

アンケートは、各教室の講師に依頼し、休み時間や、時間の終了後、アンケートに答えるよう指示してもらった。

III 調査結果

さて調査結果に移ろう。まず受講生の特性からみていく。

1 受講生の特性

日曜子ども教室は、高松市全域の小・中学生を対象に受講生を募集しているが、実際に参加する者をみると、かなり明確に地域的なかたよりをみることができる。

図1は、第14回日曜子ども教室に参加した小学生全員の所属学校を調べたものである。●が15人以上、◎が10～14人、○が5～9人を示している。★の市民文化センターを中心に円を描くと、半径2km圏内に約65%、4km圏内に約95%が含まれてしまう。それも、2kmをこえと文化センターへの交通の便のよいところが多くなっている。

次に、受講生の学年はどうか。募集は各コースとも複数学年制をとっている。表2は、同じく第14回日曜子ども教室参加申込者全員を募集学年別コースにわけて、その内訳を示したものである（従ってアンケート数と異なる）。

この表から次の2点がよみとれる。第1は、中学生の参加がきわめて少ないこと。第2は、3学年合同コースの場合、どれも最低学年とその次の学年に片より、最高学年の受講

表1 アンケート調査回答者の内わけ

| コース | | 科学 | 図画 | 囲碁 | 油絵 | 社会 | 音楽 | 工作 | 天文 | 合 計 | | |
|-----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|-----|-----|-----|
| | | | | | | | | | | 男 | 女 | 計 |
| 小学 | 4年 | 30 | 12 | 16 | 16 | 10 | 0 | 31 | 0 | 74 | 41 | 115 |
| | 5年 | 14 | 16 | 11 | 8 | 13 | 5 | 12 | 0 | 44 | 35 | 79 |
| | 6年 | 4 | 4 | 4 | 8 | 7 | 5 | 4 | 0 | 15 | 21 | 36 |
| 中 学 | | 0 | 3 | 3 | 4 | 5 | 9 | 1 | 6 | 15 | 16 | 31 |
| 合計 | 男 | 34 | 17 | 32 | 9 | 13 | 5 | 35 | 3 | | | 148 |
| | 女 | 14 | 18 | 2 | 27 | 22 | 14 | 13 | 3 | | | 113 |
| | 計 | 48 | 35 | 34 | 36 | 35 | 19 | 48 | 6 | 148 | 113 | 261 |

図1 地域的分布 (第14回日曜子ども教室申込者のみ)
(但し小学生のみ)

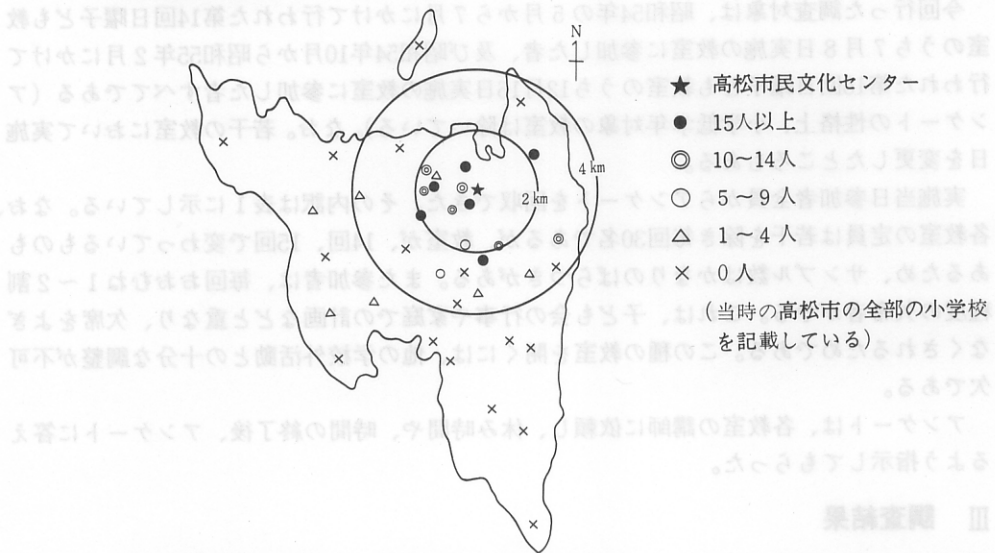


表2 受講生の学年 (第14回日曜子ども教室申込者のみ) (%)

| コースの種類 | 小 学 | | | | | | 中 学 | | | 計 |
|------------------|--------------|--------------|-------------|--------------|--------------|--------------|-------------|-------------|-------------|-----|
| | 1 年 | 2 年 | 3 年 | 4 年 | 5 年 | 6 年 | 1 年 | 2 年 | 3 年 | |
| 小学1.2年コース | 29 (58.0) | 21 (42.0) | — | — | — | — | — | — | — | 50 |
| 小学1.2.3年コース | 12 (40.0) | 15 (50.0) | 3 (10.0) | — | — | — | — | — | — | 30 |
| 小学4.5.6年コース | — | — | — | 14 (46.7) | 13 (43.3) | 3 (10.0) | — | — | — | 30 |
| 小学4.5.6年, 中学生コース | — | — | — | 65 (45.0) | 42 (29.2) | 26 (18.1) | 5 (3.5) | 6 (4.2) | 0 | 144 |
| 中 学 生 コ ー ス | — | — | — | — | — | — | 3 (30.0) | 3 (30.0) | 4 (40.0) | 10 |

表3 学校での成績 (%)

| 成績 | 性・学年 | 性 別 | | 小 学 | | | 中 学 | |
|----------|------|------|------|------|------|------|------|------|
| | | 全 体 | 男 | 女 | 4 年 | 5 年 | | 6 年 |
| だいたいよいほう | | 43.3 | 47.3 | 38.1 | 49.1 | 44.3 | 27.8 | 38.7 |
| 少しよいほう | | 19.5 | 18.9 | 20.4 | 21.1 | 16.5 | 25.0 | 16.1 |
| ふ つ う | | 25.7 | 21.6 | 31.0 | 21.9 | 30.4 | 27.8 | 22.6 |
| 少しわるいほう | | 5.0 | 6.1 | 3.5 | 2.6 | 2.5 | 11.1 | 12.9 |
| だいぶわるいほう | | 2.7 | 3.4 | 1.8 | 1.8 | 2.5 | 2.8 | 6.5 |
| 無 答 | | 3.8 | 2.7 | 5.8 | 3.5 | 3.8 | 5.6 | 3.2 |

生はきわめて少ない点である。第15回日曜子ども教室もほぼ同じような傾向にあった。

以上をふまえて、受講生自身の特性について、今度はアンケートをもとに詳しくみることにする。表3は、受講生の学校での成績をみたものである(自己評価)。全体にかなり成

績のよい者たちが受講している。彼らに自己評価させたものだが、先に同じ方法で一般児童に行った調査では、ほぼ5段階に正規分布していた⁽⁷⁾。従って必ずしも厳密にはいえないとしても、一般の児童と比べ、かなり成績がよいことは疑いない。女子より男子の方が、高学年より低学年の方が、成績のよい者が多い。彼らは学校の授業に対しても41.0%のものが「非常に楽しい」、38.7%が「まあまあ楽しい」と答え、学校でもかなり活躍していることが予想される。

また、学校の授業以外での友だちとの協同学習も「よくする」(18.8%)と「ときどきする」(40.6%)をあわせると59.4%となり、先に調査した一般の子どもたちよりかなり高い率を示している。調べる期間は、「2～3日ぐらい」が35.1%「1週間ぐらい」が36.7%。あわせて70%近くは1週間以内ということになる。あとの30%の者は1ヵ月から1年近く継続している。男子ほど、低学年ほど協同学習を活発に行っているものが受講している。

こういった一般的に積極的な行動のうかがえる受講生の特性は、「日曜子ども教室」受講の動機を聞くことによって一層明らかになる(表4)。「あなたはなぜこの日曜子ども教室に参加しましたか」という質問に対し、全体では、「自分でおもしろいと思ったから」が80.1%と段然トップ。「自分で、あるいは友だちと何かを調べたかったから」という積極組は31%、「友だちがいくので」や「お母さんがいけというから」という消極組は27.6%。やはり、成績のよい者ほど、積極組が多くなる。また、各教室ごとに動機をみるとかなりのばらつきがある。科学教室を受講しているものは、非常に積極的な参加動機をもっている。また囲碁教室や音楽などは、他に比べ若干消極的動機が多い。しかし、全体からみれば、どの教室も自己による動機づけが強いことがわかる。

本来、社会教育場面での学習は、個人の自由意志にまかせられるため、この結果は当然であるとはいえ、学習塾へ行く子どもたちの動機と比べて格段の差があるといえよう⁽⁸⁾。なお、受講生は2つのコースにまたがって受講することはできないことになっている。以前に日曜子ども教室に参加したものは、全体の44.4%。14回と15回を比べてもだいたい同じ率であった。

2 学習者に対する教育力

このように積極的な動機をもち、きわめて意欲的に参加する子どもたちに対して、日曜子ども教室での学習はどういった役割をはたしているだろうか。日曜子ども教室の学習者に対する教育力についてみていくことにしよう。

表4 受講の動機 (％)

| 動機 | コース | 全体 | 科学 | 図画 | 囲碁 | 油絵 | 社会 | 音楽 | 工作 | 天文 |
|-----------------|-----|------|------|------|------|------|------|------|------|------|
| 自分でおもしろいと思ったから | | 80.1 | 81.3 | 68.6 | 73.5 | 83.3 | 77.1 | 84.2 | 87.5 | 100 |
| 自分で何かを調べたかったから | | 22.2 | 60.4 | 28.6 | 8.8 | 11.1 | 20.0 | 10.5 | 6.3 | 0 |
| 友だちがいくので | | 8.4 | 6.3 | 2.9 | 14.7 | 11.1 | 5.7 | 15.8 | 6.3 | 16.7 |
| 友だちと何かを調べたかったから | | 8.8 | 29.2 | 11.4 | 2.9 | 5.6 | 0 | 5.3 | 2.1 | 0 |
| お母さんがいけというから | | 19.2 | 18.8 | 20.0 | 41.9 | 8.3 | 14.3 | 26.3 | 12.5 | 16.7 |
| 学校の勉強のためになるから | | 23.4 | 39.6 | 42.9 | 8.8 | 11.1 | 34.3 | 15.8 | 6.3 | 33.3 |
| その他 | | 6.9 | 2.1 | 2.9 | 8.5 | 0 | 5.7 | 42.1 | 6.3 | 0 |

「該当するものを全部あげてください」という形でこたえさせた。

(この種の表について以下すべて同じ要領でこたえさせている)

表5 よかった理由

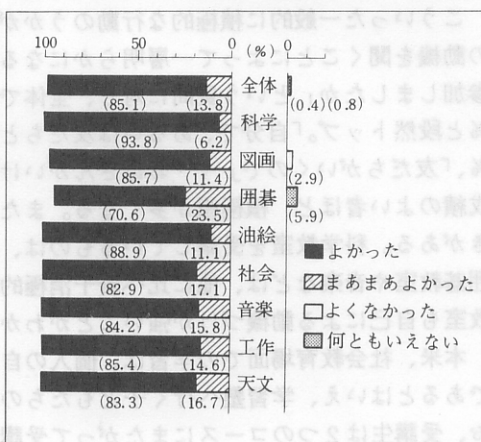
(「よかった」「まあまあよかった」と答えた人のみ)

(%)

| 理由 | コース | 全体 | 科学 | 図画 | 囲碁 | 油絵 | 社会 | 音楽 | 工作 | 天文 |
|------------------------------|-----|------|------|------|------|------|------|------|------|------|
| わからないところが わかった | | 57.5 | 87.5 | 71.4 | 79.4 | 41.7 | 45.7 | 52.6 | 27.1 | 33.3 |
| 友だちができた | | 35.2 | 52.1 | 25.7 | 50.0 | 22.2 | 17.1 | 26.3 | 43.8 | 16.7 |
| 自分で勉強する 方法がわかった | | 24.9 | 35.4 | 34.3 | 11.8 | 22.2 | 34.3 | 10.5 | 20.8 | 0 |
| 友だちといっしょに 勉強する方法が わかった | | 14.2 | 25.0 | 11.4 | 14.7 | 11.1 | 8.6 | 5.3 | 16.7 | 0 |
| 学校の勉強に 役立った | | 32.2 | 58.3 | 54.3 | 0 | 22.2 | 37.1 | 5.3 | 27.1 | 33.3 |
| その他 | | 11.9 | 6.3 | 0 | 5.9 | 16.7 | 5.7 | 57.9 | 10.4 | 33.3 |

まず、単刀直入に「日曜子ども教室に参加してどう感じたか」尋ねてみた。図2で、黒く塗りつぶした部分が「よかった」と答えた者の割合である。全体で85.1%。斜線が「まあまあよかった」と答えた者で、13.8%。双方あわせると98.9%にもなり、ほとんどが積極的評価を下している。また成績別にみると、よいものほど満足度も高い。この傾向は、各教室ごとにみてもほとんどかわらない。

図2 日曜子ども教室に参加してどう感じたか



よかった理由をきいてみると(表5)、「わからないところがわかった」が断然高くなっている。全体では57.5%。とくに科学では87.5%、囲碁や図画でも70%以上のものがあげている。また、「自分で勉強する方法がわかった」としたのも、科学、社会、図画に多く、受講の動機が、かなりかなえられていることがうかがえる。さらに「友だちができた」とする割合も全体で2番目に高く、この方面での効用もみのがせない。友だちができ、さらに協同学習にまでもっていく指導法が今後の課題としてあるように思う。受講の動機と関連して高い数値を示すのが「学校の勉強に役立った」である。やはり、科学、図画、社会が高い。

しかし、これらは各コースによって大きなちがいがあり、むしろ各コースの特徴がでてみるとみたほうが妥当である。各コースごとに多様な評価を行っていることがわかる。

では、このように積極的評価を示す受講生は、学校の勉強と比べて「日曜子ども教室」の学習をどう感じているだろうか。先にみたように、彼らの大半は、学校生活は楽しいとこたえている。にもかかわらず、図3をみると、「日曜子ども教室での勉強の方がおもしろい」と答えたものが全体で64.4%、「学校の勉強」と答えたものは3.1%にすぎない。とくに天文、工作、科学、社会などは70%以上のものが学校の勉強よりおもしろいと答えている。これは成績ごとにクロスさせてもほとんどかわっていない。成績の上位のもの下位のものともに、学校の勉強よりかなりの魅力を感じているのである。

なぜそう感じるのか。表6は「日曜子ども教室の方がおもしろい」と答えたものに、その理由をきいたものである。「先生がわかりやすく教えてくれる」が全体で63.7%。勉強の自由さ(44.6%)、自分で工夫できる(44.0%)、かわった教材を使う(41.7%)などが高い。

表 6 日曜子ども教室の方がおもしろい理由

(「日曜子ども教室の方がおもしろい」と答えたもののみ)

(%)

| 理由 | コース | 全体 | 科学 | 図画 | 囲碁 | 油絵 | 社会 | 音楽 | 工作 | 天文 |
|--------------------|-----|------|------|------|------|-------|------|------|------|------|
| 自由に勉強できる | | 44.6 | 54.3 | 30.0 | 36.8 | 47.4 | 60.0 | 28.6 | 34.2 | 80.0 |
| 自分でいろいろ工夫できる | | 44.0 | 42.9 | 35.0 | 26.3 | 73.7 | 28.0 | 0 | 68.4 | 0 |
| 上級生や下級生といっしょに勉強できる | | 19.0 | 25.7 | 20.0 | 15.8 | 31.6 | 20.0 | 14.3 | 10.5 | 0 |
| 先生がわかりやすく教えてくれる | | 63.7 | 74.3 | 90.0 | 78.9 | 100.0 | 68.0 | 28.6 | 23.7 | 20.0 |
| かわったものを使ったりする | | 41.7 | 60.0 | 15.0 | 26.3 | 63.2 | 36.0 | 57.1 | 36.8 | 20.0 |
| その他 | | 10.7 | 2.9 | 15.0 | 10.5 | 0 | 4.0 | 57.1 | 18.4 | 0 |

先生の力量、授業の工夫、自由さ、教材のきばつさといった要因が受講生に学校以上の興味をもたせるのである。各コース別にみると、先ほどもた参加してよかった理由と同様、かなりのばらつきがみられ、コースごとの特徴がよくあらわれている。しかし、基本的には、それぞれ全体的傾向を反映しているといえよう。

学校教育よりおもしろい理由としてあげられたこれらの要因は、社会教育場面において存分に発揮できる特性であるとはいえ、当然学校教育の中でも考えねばならないことがある。だとすれば、以上の結果は、現在の学校教育そのものへの警告ともうけとれる。

なお、具体的なテストは行っていないが、おそらくこういった反応から、受講生の思考力、創造力は大いに啓発されていることが予測できる。

では次にこのような学校外教育は、今後の学習にどういった点で役立つのか、今後の学習への発展性についてみていきたい。

図4の①②③は、日曜子ども教室の効用を、「学校の勉強にとって」「自分でする勉強にとって」「友だちとする勉強にとって」の3つに分け、コースごとにみたものである。各図の左側は、積極的評価を示している。■が「非常に役立った」としたものの、▨が「少し役立った」としたものの割合である。全体で見ると、それぞれ大むね70%以上のものが、積極的評価を行っていることになる。

とくに、「自分でする勉強にとって」は、「非常に役立った」が62.1%、「少し役立った」24.1%あわせて86.2%にもなる(図4-①)。これには当然のことながら、先にみた、受講の動機が反映しており、それぞれの目的が十分はたされているとみることができる。各コース別にみても全部のコースにおいて、■部分が過半数を占めている。「あまり役立たない」「ぜんぜん役立たない」とこたえたものは、最高の囲碁でもあわせて14.7%にすぎない。各コース受講者はそれぞれ「日曜子ども教室」での学習を自分で行う勉強に役立てており、この方面での今後の学習への発展が大いに期待できるのである。

一方、「学校の勉強にとって」はどうか(図4-②)。本来「日曜子ども教室」などの学習

図 3 学校の勉強との比較

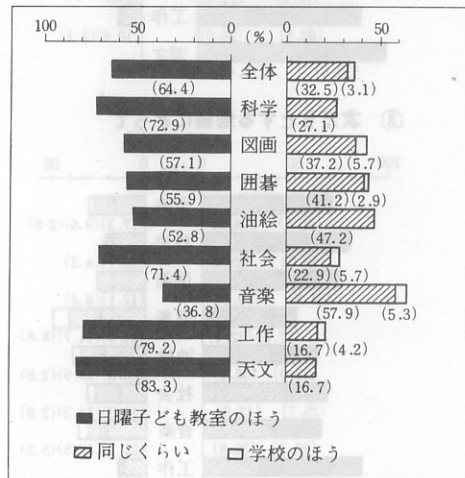


図4 他の勉強への効用



教室は、学校の勉強への効用を直接目的としていないが、3割近くは、それへの期待もっていることはすでにのべた。彼らは大むねその目的を達成しているようである。否定的意見の多いのは、学校に教材のない囲碁教室、それに学校でギターなどの教材を使わない音楽のみで、あとは、ほとんど10%未満である。受講時に、直接目的としていなくても自然のうちに学校の勉強に役立っていることがうかがえる。

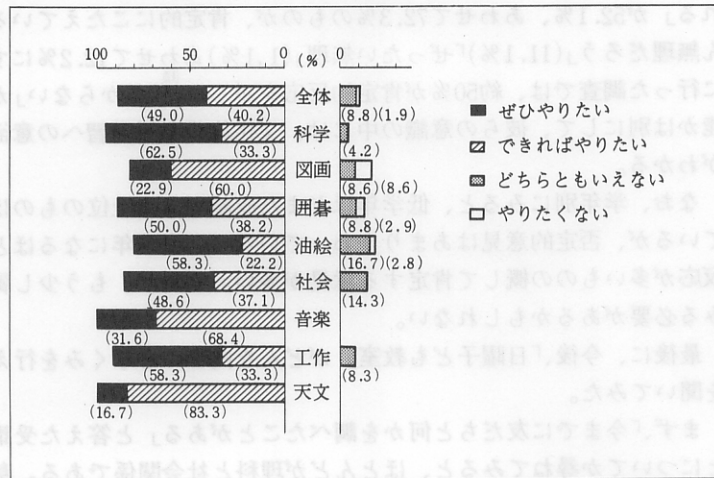
また「友だちとする勉強」においても(図4-③)、各コースごとにかんがりのばらつきはみられるものの、やはり肯定的反応が圧倒的である。

以上の結果をみるかぎり、「日曜子ども教室」での学習が、他の様々な学習に対して相当役立っていることが理解できる。このことは当然、その学習に対する継続希望となってあらわれるだろう。図5は、「さらに続けて日曜子ども教室で行ったような勉強をしようと思うか」きいたものである。■の「ぜひやりたい」が全体で約半分、▨の「できればやりたい」をあわせると90%近くが、継続希望もっている。「やりたくない」とこたえたものは、わずか5人で1.9%にすぎない。以前に日曜子ども教室をうけたものと今回初めてのものとを比較しても、経験者の方が若干高くなってはいるが、ほぼ同様の積極的希望を示してい

る。また、コース別にみると、科学教室、油絵教室、工作教室などは「ぜひやりたい」が6割近くを占める。これらはいずれも受講生の興味を喚起させ、学習者が様々な工夫を自由に行える要素の強い教室である。

では、彼らはどういった方法で勉強を続けようとしているのか。図5で「ぜひやりたい」

図5 「さらに続けてこのような勉強がしたいか」



「できればやりたい」とこたえたものに、「おもにどんな方法で勉強したいか」聞いてみた。全体で見ると「友だちといっしょに」が1番多く52.8%、「自分で本などをかってきて」が42.5%、「文化センターへ聞きに来たりして」が32.2%、「学校の先生に聞いたり、クラブ活動で」が31.8%、「その他」が6.4%になっている。

先ほどみた日曜子ども教室の他の勉強への効用の結果をさらに具体的な形で示していることがわかる。本やセンターへ聞きにきて、自分で行う、友だちと行う、学校で行う(先生とやクラブ活動で)、といったふうに広範囲に学習活動が発展しようとしているのである。

しかし、欲をいえば「文化センターへ聞きにきて」がもう少し、高くてもよい。文化センターを学校の授業やセンター学習以外で利用した者を調べると、「よく利用した」が46.4%、「ときどき利用した」が42.5%にもなっている。児童図書館(89.8%)、プラネタリウム室(73.5%)、科学展示室(53.5%)などを中心に気軽にセンターへ出入りしている実態からみて、もう少し学習相談機関としての機能を果たすようなとりくみが期待される。なお、文化センターの利用状況は、受講生以外の小・中学生を対象に行った調査でも「よく利用する」36.1%、「ときどき利用する」47.3%という高い率を示している。⁽⁹⁾

また、文化センター以外の文化施設の利用状況を聞いてみると、受講生の24.5%が「よく利用する」、44.8%が「ときどき利用する」とこたえている。利用する施設は、屋島にある民家博物館の「四国村」(63.9%)、図書館(63.5%)、美術館(41.1%)、自然の家(30.1%)、公民館(25.1%)など、身近なものから、かなり離れたものまで広範囲に及ぶ。一般の小・中学生を対象に行った調査でも、ほとんど同じ傾向であった。⁽¹⁰⁾ もっとも、「よく利用する」は11.8%にすぎなかったが。

こういった、子どもたちの文化施設利用状況を考えるとき、それを媒介にして、彼らの知的な欲求をすいあげ、さらに発展させてやる、組織だった文化施設側のとりくみが望まれる。そういったとりくみが積極的になされるとき、各文化施設の利用状況の高さと、以上にみた「日曜子ども教室」に対する反応及び、各施設の催しに対する反応⁽¹¹⁾などから判断して、塾にとられている子どもたちを文化施設にひきよせる可能性が大なることを指摘できるのである。

さらに問題を進めて、「もし学校での勉強がなくても文化センターなどを利用して勉強が

続けられるか」を聞いてみた。全体では「ぜったい続けられる」が20.3%、「たぶん続けられる」が52.1%、あわせて72.3%のものが、肯定的にこたえている。否定的反応は、「たぶん無理だろう」(11.1%)「ぜったい無理」(1.1%)あわせて12.2%にすぎない。一般の小学生に行った調査では、約50%が肯定的反応を示した(「わからない」が32.8%)。現実¹²⁾に実現可能かは別にして、彼らの意識の中には、文化施設利用学習への意欲と期待が相当強いことがわかる。

なお、学年別にみると、低学年ほどまた成績別では上位のものほど積極的な肯定を示しているが、否定的意見はあまりかわっていない。高学年になるほど「わからない」とする反応が多いものの概して肯定する意見が多い。しかし、もう少し属性ごとの特徴を調べてみる必要があるかもしれない。

最後に、今後、「日曜子ども教室」がどんな内容のとりくみを行えばよいか、彼らの興味を聞いてみた。

まず、「今までに友だちと何かを調べたことがある」と答えた受講生に、それはどんなことについてか尋ねてみると、ほとんどが理科と社会関係である。身のまわりのことから専門的なことまで、広範囲に及んでいる。「さらに、どのような日曜子ども教室があればいいと思いますか」という問いには、社会、理科と同時に、体育や音楽、図工・美術関係の希望も多いのである。とくに体育は多くのものがあげている。算数や国語に関する希望もうかがえる。

男女差をみると、女性だけにあるものが、音楽、家政関係である。また、男性だけでは、しょうぎや鉄道教室などがある。また、現地学習や、旅行をかねた学習などの要望もでていいる。

IV まとめと今後のとりくみへの提案

以上、高松市民文化センターの「日曜子ども教室」受講生の分析とアンケート調査によって、研究目的1、2を明らかにすべく調査結果を分析してきた。それらをまとめることから研究目的の3、文化施設は今後どういったとりくみを行えばよいか若干の提案を行うことにしたい。

1 調査結果のまとめ

まず、研究目的1の受講生の特性からみていこう。およそ次の5点にまとめられる。

第1に、受講生の通う学校と文化センターまでの距離は、2 km以内が約65%、4 km以内が約95%である。

第2に、受講生はほとんどが小学生であり、中学生はあまり参加しない。また3学年以上を混合の教室にすると、最低学年と次の学年に片よる傾向がある。

第3に、学校での成績はかなりよい者が多く、ほとんどの者が学校生活を楽しく過ごしている。

第4に、友達との協同学習は約6割の者が行っており、一般の者と比べかなり活発である。

第5に、受講の動機は、各コースによって異なるが、どれも自己による動機づけが圧倒的である。

次に研究目的2の学習者に対する教育力ではどうか。

第1に、受講後の感想はほとんどの者が満足感を示している。その理由は、「わからない

ところがわかった」が断然多い。また、仲間の形成や学校の勉強への効用、勉強方法の理解などの理由も多い（各自の受講目的はほぼ達成されているようだ）。

第2に、ほとんどが「学校よりおもしろい」(64.4%)「同じくらい」(32.5%)と感じている。その理由は、先生の教え方のよさ、勉強の工夫・自由さ、教材の特異性など。

第3に、子ども教室での学習は、学校・自分・友だちでする勉強それぞれに大いに役立っている。とくに自分でする勉強に対して、効用が高い。

第4に、ほとんどの者が、さらにこのような勉強を続けることを望んでいる。その方法も、友だちと、自分で、文化センターへきて、学校の先生に聞いたりクラブ活動で、など多様である。

第5に、受講生の文化センター利用率は高い。また他の文化施設利用も、身のまわりのものからかなり離れたものまで広範囲に及ぶ。

第6に、70%近くのものが、学校の勉強がなくても文化センター等を利用して勉強を続けられるとする。

第7に、友だちと今まで行った学習は、社会・理科関係が圧倒的である。身近な題材の学習が多い。「日曜子ども教室」の今後の希望は、実技的なものが多い。男女差も考慮する必要がある。

以上、高松市民文化センターが行う「日曜子ども教室」の学習者に対する教育力は極めて限られた調査からではあるが、興味の喚起、知識・思考力の育成、発展性（意欲、仲間づくり）という側面からみた場合、かなりの効果があることが明らかになった。それは、学校と比べて同等以上の可能性をもつことも指摘できた。つまり、文化施設が、学校とともに、我々のいう「子どもの学習コミュニティ」の核になる可能性の大なることを示しており、今後のとりくみしだいでは、営利学習施設による学習塾一辺倒の学校外教育から文化施設中心型の学校外教育への移行が十分可能なことをも示している。

これらをふまえて、文化施設の行う子ども教室への若干の提案を行いたい。

2 今後のとりくみへの若干の提案

まず第1は、半径2～3km円内に一箇所の割で、計画的な学習活動の可能な文化施設を設けて、子ども教室などを積極的に開く。¹³⁾

第2に、その募集形態は小学生を中心とし、2学年の混合学習とするのが望ましい。ただし、将来においては、中学生や高校生も参加可能な催しを考える必要がある。

第3に、とりあげる内容は、理科（科学）と社会、とくに地域や身のまわりのことを中心とした教室を核にして、子どもの多方興味にこたえるようにする。子どもたちは、実験、現地観察や現地調査及び創作など活動的なものを好むし、¹⁴⁾そこに、文化施設利用学習の独自性もみだせるからである。

第4に、教育方法に関しては、勉強の自由さ、学習の工夫、教材の奇抜さなどをとくに考慮する。

第5に、各分野専門の講師を確保すること。また、終了後も子どもの学習要求に答えられるよう、講師（たとえば、退職者、婦人、学生などの知的有関者）の登録制度を考えるとよい。¹⁵⁾相談機関としての役割をもあわせもつ必要がある。

第6に、さらに学習の発展性に関連して、子ども教室参加を機に、仲間集団がつくれるよう配慮する。終了後も文化施設や仲間と接触が保てるようにすることが望まれる。

第7にPRあるいは文化施設への関心といった面で、学校との連絡を密にする（できれ

ば、家庭とも連絡を密にしたい)。また教材の相互貸し出しや、先生の協力も必要である。¹⁶⁾

おわりに——今後の課題

はじめにでものべたが、本研究は、営利学習施設による学習塾教育一辺倒の学校外教育を打破し、子どもの自主性を生かした望ましい学校外教育システムが確立できないだろうか、という問題意識から、その可能性を文化施設利用学習に求めて、若干の考察を行ったものである。

今回の調査は、総合的な学習の可能な文化施設の行う「子ども教室」をとりあげたものであるが、今後はさらに、様々なタイプの文化施設においてどういった「子ども教室」を開けばよいか検討したい。¹⁷⁾

第2に、文化施設のもう一方の教育力としてあげた地域社会に対する教育力は、「子ども教室」の中で、あるいはそれを媒介としてどのように高めていけるか。このあたりの追求も加えて文化施設の教育力を総合的にとらえていきたい。¹⁸⁾

第3に、文化施設利用学習を中心として、学校外教育のシステム化を計る場合、子どもの自由な時間をかえて束縛することになりはしないか。参加への自由とシステム化をいかに両立させるか。¹⁹⁾とくに一部活発なもののみでの独占になることはないか。

第4に、こういった学校外教育の改革は、受験準備体制に支配されている学校教育そのものの改革をぬきにしては考えられない。今日の「ゆとりある充実した学校教育」追求との関連で、文化施設を中心とする学校外教育をいかに発展させればよいか。²⁰⁾

こういった点を明らかにすることから、我々が最終的にめざす「子どもたちの望ましい学習コミュニティづくり」²¹⁾のあり方を探っていこうと考えている。

〈注〉

(1)文部省大臣官房調査統計課『全国の学習塾通いの実態』ぎょうせい 1977

(2)たとえば、NHK放送世論調査所が1979年に行った調査では、学習塾へ行っている者が小学6年生26.4%、中学2年生39.5%であった(NHK放送世論調査所編『日本の子どもたち』日本放送出版協会 1980)

(3)学校外教育には、広く解すれば、学校以外の場で行われる学校教育としての校外学習や校外活動も含まれるが、ここでは狭義に、下校後の家庭や地域社会における教育のみをさしている。通常学校外教育といった場合、後者をさすのが一般的である(吉田昇編『学校外教育』亜紀書房 1979: 58頁)。

(4)文部省を中心とする政策については、拙稿「変動社会における子どもの社会教育の展開」(『研究紀要第10号』高松短期大学 1980 所収)参照。

(5)拙稿「子どもの文化施設利用学習の可能性に関する一考察」(日本教育社会学会編『教育社会学の展望(学会紀要第34集)』東洋館出版、1979、114-125頁)、拙稿「子どもの文化施設利用学習の具体的展開に関する調査研究—小学生の実態及び希望調査を中心として—」(『教育学研究紀要第24巻』中国四国教育学会、1980、61-64頁)、拙稿「変動社会における子どもの社会教育の展開—学習コミュニティづくりのための調査研究—」(『研究紀要 第10号』高松短期大学1980 1-15頁)等で論述した。

(6)最近の研究に限ってみると、総理府の行ったものとして、『青少年施設に関する調査』(1972)、『青少年の非宿泊型余暇利用施設に関する六市の事例調査』(1976)『我が国における青少年教育文化施設に関する調査研究』(1978)等がある。また、行政管理庁行政監察局編『公的余暇施設の

現状と問題点』大蔵省印刷局 1977、総理府青少年対策本部編『青少年白書』大蔵省印刷局 毎年、文部省『社会教育調査報告書』大蔵省印刷局 3～5年ごと、などによって文化施設の実態はかなり詳しく知ることができる。地方の自治体においても、例えば、新潟県教育庁社会教育課では、『少年教室研究集録』(1974)を出しているし、東京都なども『大都市青少年の余暇構造及び余暇利用施設に関する調査』(1973)などを行っており、この種の調査には事欠かない。しかし、それらの中で実際に文化施設の行う子ども教室参加者に、その反応を調査した体系的なものはほとんど見あたらない。

さらに、調査を主とした研究書も、酒匂一雄編『地域の子どもと学校外教育』東洋館出版 1978、瀬沼克彰『余暇と青少年』学文社 1978、松原治郎他『地域社会における生涯学習の展開』総合研究開発機構 1979、河野重男・伊藤俊夫編『社会教育の施設』第一法規 1979 など数多く出版されているが、やはりそういった調査はみられない。

(7)拙稿、前掲論文(1979)、(1980)で行った調査。

(8)先にみたNHK世論調査所の調査では、「自分でいきたいと思ったから」が39.1%、「お父さんやお母さんに行くように言われたから」が44.5%となっている(NHK放送世論調査所編、前掲書、基本属性別集計結果表22頁)。

(9)拙稿、前掲論文 1979 120頁

(10) 同上 121頁

(11)拙稿「子どもの文化施設利用学習の具体的展開に関する調査研究—小学生の実態及び希望調査を中心として—」(『教育学研究紀要 第24巻』中国四国教育学会、1980)62頁

(12) 同上 63頁

(13)先にあげた総理府の調査では、どの調査結果をみても、家から施設への所要時間は、ほぼ15分～30分以内で利用される割合が一番多い。

(14)新潟県教育庁社会教育課、前掲書でも同様の調査結果をえている。

(15)すでに、各県には「スポーツ人材銀行」や「高齢者人材銀行」などを設置しているところもあるが、さらに発展させて、子どもの学習活動に手をかそうとする人々を対象にした「アカデミック・バンク」がつかれないかと考えている。

(16)新潟県教育庁社会教育課、前掲書では、科学部門の教室でとくに必要だとしている。

(17)文化施設のタイプごとの学習展開モデルが作成できればと考えている。また瀬沼克彰氏は子ども用文化施設自体のモデル開発も早急に必要だとされている(瀬沼克彰『余暇と青少年』学文社 1978、101頁)。

(18)こういった点をほりおこすには、今回はとりあげなかったが当然イデオロギー的な検討も必要となる。

(19)たとえば、木全力夫「学校外教育の自由と公共性」(酒匂一雄編『地域の子どもと学校外教育』東洋館出版 1978 120—131頁)は、この問題に対し興味深い分析を行っている。

(20)学校と社会との関係に関する興味深い本として、清水義弘『地域社会と学校』光生館 1980、松原治郎編『コミュニティと教育』学陽書房、1977、林部一二『学校教育と社会教育』明治図書 1976、湯上二郎、坂本昇一編『学校と地域の青少年指導』教育開発研究所 1978、永井憲一編『学校教育と社会教育の結合』勁草書房等がある。またアメリカの例としては、Kindred I. w., D. Bagin, D. R. Gallagher., the School and Community Relations, Prentice-Hall, Inc, 1976., Burby, III R. J., Schools in New Communities, Ballinger, 1977などが参考になる。

(21)このことに関しては、拙稿、前掲論文、1980(高松短期大学『研究紀要』第10号所収)にお

高松短期大学研究紀要

第 11 号

昭和56年3月1日印刷

昭和56年3月10日発行

編集発行

高松短期大学

〒761-01 高松市春日町960

印刷

新日本印刷株式会社

高松市木太町2158